

夏目漱石の『心』論

— 三人の死を通して見た「明治の精神」を中心として —

李 美 正

(2001年9月28日受理)

A study on “KOKORO” of Natsume Souseki
— Focusing on ‘the spirit of Meiji’ in the death of three persons —

Lee Mijung

Generally, “KOKORO”, written by Natsume Souseki has been studied as a piece of psychological or romantic literature since it was written. However, this thesis examines “KOKORO” as a novel reflecting the Meiji period. More concentration is placed on the importance of sacrificial suicide practiced in the Meiji period. ‘Chichi(father)’ of narrator symbolizes the general public under imperialism, and ‘Sensei(teacher)’ and ‘K’ represent the educated class. In conclusion, the analysis shows that ‘the spirit of Meiji’ has double meanings. The death of ‘Chichi’ shows a devotion to nationalism, where as the death of ‘Sensei’ and ‘K’ shows suicides sacrificed for the death of the democratic spirit of Meiji.

Key Words: Natsume Souseki, “KOKORO”, ‘The spirit of Meiji’

キーワード：夏目漱石、『心』、『明治の精神』

1. はじめに

日本における明治維新(1868年)は、江戸幕府という封建時代が幕を下ろした後、近代国家の形成に大きな影響を及ぼした一つの大革命であった。明治維新の当時、近代日本は、国家主義ともいえる国権論と、個人の自由、人権など、個性を重視する民権論の二つの流れの中で多様な可能性¹を持って出発した。しかし、日清戦争(1894~1895年)後、国権論の方、すなわち帝国主義的な道を歩むようになって、個人よりは国家を優先し、国家権力を伸長しようとする意志だけが強くなった。それによって一方では手段と方法を選ばない立身出世主義²的な風潮がますます横行して伝統的な倫理観の急速な崩壊が進展され、他方では現実から顔を背ける精神主義³のような非政治的な個人主義が現れて政治的な個人の消滅とともに政治離脱が進展された。

このような混乱期を経て帝国主義の時期を経験してきた多くの知識人の一人であった夏目漱石(1867~1916年)は立身出世主義とは対立する個人主義的な立場から「現代日本の開化」、「私の個人主義」という講演と

『それから』、『草枕』、『心』などの作品を通じて自分の思想を描いている。

特に『心』は朝日新聞に連載された(1914. 4. 20~8. 11)彼の後期3部作小説の一つで、心理小説、教養小説、同性愛的小説などとしてよく知られているが、さらに明治知識人の孤独な生と内面的悩みが中心を成す、時代の思想を反映した作品だと言える。

本稿では『心』に見られる「明治の精神に殉死する」(p.297)⁴という表現を素材にしてこの作品を分析し、また一般民衆を代表する「私」の父と一部の知識人を代表する「K」と「先生」の三人の死に現れた意味を通じて「明治の精神」を考察してみようと思う。

2. 『心』に表れた人物の対立的構図

『心』の時代は日清・日露戦争を経て、日本が帝国主義的な近代国家を目指す明治時代後半を背景としているが、漱石はこのような明治時代の近代化を内発的ではなく外発的であると批判している。すなわち、日本が本来持っていた伝統に根ざしつつ、個人の意識や

生活に基礎を置いて近代化されなければならないのに、日本はその伝統を無視したまま西洋の形式だけを模倣し、無理な近代化を押し進めて来たというのである。日本はこのような内発的な近代化をしなければならないにもかかわらず、帝国主義的な近代国家の道＝国権論的な近代国家の道をひたすら歩んだため、伝統的な倫理観が崩壊し、それに替わる新しい共通の理念が形成できなかつた。残ったのは、帝国主義的な国家統合に見合った倫理なき立身出世主義であり、それにくみしない良心的な知識人達は連帯の環を断ち切ったまま、自己の内面世界に閉じ籠るほかなかつた。

『心』はこのような明治時代を生きる人物たちをよく描いているといえよう。すなわち、明治時代に表れた国権論ともいえる国家主義・立身出世主義と、民権論を重視する非政治的な個人主義との対立的構図をとっているといえよう。前者に属する人物としては、先生の叔父と私の父、後者に属する人物としては、先生とその親友のKがあげられる。

前者の代表的な例として先生の叔父は、事業家から県会議員になり、政党にも縁故がある人として当時の日本の地方においては典型的な立身出世の段階を踏んでいる国家主義に属する人物であった。その叔父に財産を横領された先生は、叔父を次のように表現している。

普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪と共に私は此叔父を考へてゐたのです。(p. 173)

叔父は先生の両親の死後、先生の世話をし、財産も管理することにしたが、むしろその財産を横領する。そして叔父はそれをごまかすために自分の娘と先生を結婚させようとするが、結局先生に気付かれ、失敗に終わってしまう。それ以来先生は叔父を、自分の利益のために先生を利用した人として認識するようになる。このように先生の叔父は、自分の出世や利益のためなら手段と方法を選ばない立身出世主義者として、その時代が作り出した国家主義に属する人物であるといえる。

また私の父もこのような社会雰囲気包摂されている一般民衆の一人として描かれているが、私の父は先生を次のように評価する。

父の考へでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働らいてゐる。必竟やくざだから遊んでゐるのだと結論してゐるらし

かつた。(p. 120)

このように私の父は役に立つ人なら当然に社会からある程度の地位を持っているべきであると考えられる人物である。しかし先生は何の仕事もしていないので、私の父にはやくざにしか見えないのである。このような点から、私の父は立身出世を当然視する人として、広い意味では国家主義に属する人物であると言えよう。

次は後者の例として前者に属する立身出世主義を軽蔑する知識人である先生があげられる。先生は国家主義に反対する人として、国家が操作した出世志向主義についていく同級生を批難する。

実際先生は時々昔しの同級生で今著名になつてゐる誰彼を捉へて、ひどく無遠慮な批評を加へる事があつた。(pp. 30~31)

著名になつたということは、国家の願っている人つまり国家主義に属する人になつたということである。しかし先生は彼等とは違い、国権論的な明治国家を避けるため、社会とのあらゆる関係を切っているのである。このように見ると、著名になっている同級生は先生の批難的であつたと言えよう。すなわち先生は、その当時の社会風潮に抗い、自分の個性や自由のため俗世から離れて内面の世界に沈潜している非政治的な個人主義に属する人物であると考えられる。

また知識人のKも先生のように立身出世主義とは正反対の人で、「道」のため摂欲や禁欲を最優先視し、世俗的な欲望を極度に否定する禁欲主義者である。Kは幼い時、医者の子に出され、後程医者になるという条件で学費を貰っていた。しかしKはそれを拒む。

元来Kの養家では彼を医者にする積で東京へ出したのです。然るに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。(p. 202)

Kは医者よりは自分の歩んできた道を一層重視する人物である。もしKが医者になろうとしたら学費を貰いながら楽に勉強出来たのに、Kはそれを受け入れず、目の前の安楽より苦行を選ぶのである。このようにKは、国家主義に属する立身出世主義とは違う別の道を歩んでいる人物であるということが分かる。すなわちKはその当時蔓延していた立身出世という欲望を切り捨て、自分が志向する道の非現実的な世界で生きている非政治的な個人主義に属する人物であると考えられる。

このように前者に属する人物達は、自分の出世や利益のためには手段を選ばず、自分のことだけ考えて生きており、さらには国家主義的統合に動員されてそれに疑いを抱かない人々である。これに対して、後者に属する人々は、一握りの知識人であり、国家主義やそこから生じた立身出世主義という風潮に抗い、自分の個性の伸張や自由のために俗世（＝現実世界）を離れて、沈潜している人物達である。

このような対立的な構図は、私の父やK、先生の死を通じて鮮やかにあらわれているが、同時にその中に表れたそれぞれの「明治の精神」も対立的な様相を呈している。

3. 一般民衆の「私の父」の死と国権論的「明治の精神」

『心』では乃木大将の死が三人の死を解明するための重要な媒体になっている。松本三之助は「乃木の自決は、明治天皇に殉ずるための死すなわち「殉死」であると当時の人びとによって受け止められた」⁵と言い、橋川文三は「乃木大将の殉死そのものは明治天皇個人に対する忠誠の武士道徳的な現われであって、具体的な国家というものは乃木大将の眼には映らなかったのであり、国家を明治天皇個人に集中的に表象させ、そういう天皇に対する忠誠が乃木大将をして殉死せしめた」⁶と言う。このように乃木大将の死は、明治国家における国民統合の中心であった明治天皇に殉じて死んだという大きな意味を持っていることであった。乃木大将の死が当時の日本人にとっていかなる意味で受け入れられたかについて松本は、一般民衆の考え方と一部の知識人の考え方という二つの風潮⁷に分けて解釈を加えているが、その二つには大きな差のあるのが分かる。まず一般民衆において殉死ということは「世人の意表をつく古風な行動形態と結びついて、乃木を日本の伝統的道徳・武士道的忠誠の模範として賛美する風潮を生み出した」と言う。その反面、一部の知識人において殉死ということは「あまりにも旧時代的な行動のゆえに、『天地の公道』に反して居る愚拳と断ずる反対意見も表明された」と言う。このような観点からみれば、私の父は前者に属する人物であると言える。

私の父は自作農で、明治時代の典型的一般庶民、民衆である。明治時代の国家主義及びその主要政策である富国強兵策に動員された私の父は、天皇の逝去とそれに殉じた乃木大将の死を哀悼、賛美し、その時代の天皇制⁸を中心とする国家体制に包摂された人物であった。

父は時々囁語を云ふ様になつた。「乃木大将に濟まない。実に面目次第がない。いへ私もすぐ御後から」斯んな言葉をひよひ々出した。

(p. 145)

崩御の報知が伝へられた時、父は其新聞を手にして、「あゝ、あゝ」と云つた。「あゝ、あゝ、天子様もとう々御かくれになる。己も……」父は其後を云はなかつた。(p. 116)

死病に取り憑かれていた私の父の無意識的な言葉からでも分かるように、「明治天皇の崩御と乃木大将の殉死の衝撃が、草深い田舎の一老農夫にまで及ぶ、国民的なものであった」⁹と言える。すなわち乃木大将の殉死が大衆に及ぼした衝撃と感動は非常に大きかったと言える。このことから推して見ると、明治時代は天皇を君主にし、国民を臣下にする封建的君臣関係への再編成の成り立った近代国家の時代であった¹⁰と考えられる。江戸時代には武士達の間だけで成り立った主従関係であったが、明治時代は一般民衆すなわち私の父という農民まで君臣関係をまるで前々から守って来た道徳観のように従っているのである。

これは、一般民衆である私の父が、国家＝天皇のために自分の命をも捨てなければならないという近代の日本国家を支えていたイデオロギーを無意識のうちに受け入れていたことを示している。一般民衆である私の父は慢性的心臓病で死が目前に迫っているにもかかわらず、我が事以上に天皇の病気を心配し、乃木大将が天皇に続いて「殉死」したように、自分も後に続かなくてはならないという思考方式が無意識的に擦り込まれていたのである。これは、まさに私の父の死が広い意味では乃木大将の殉死とも同じ脈絡であるというのを表しているといえよう。従って一般民衆を代表する私の父の死を通して見た「明治の精神」とは、明治天皇を頂点に、富国強兵に基づく国家主義的な近代国家を形成する思想に他ならないのであり、その根源は国権論にある。すなわち父の死に表れた明治の精神を一言でいうと国権論的「明治の精神」といえる。

4. 知識人の死と民権論的「明治の精神」

(1) 「K」の死と民権論的「明治の精神」

まずKがどんな人物であるかを例文を通じてみてみよう。

仏教の教義に養はれた彼は、衣食住について兎角の贅沢をいふのを恰も不道徳のやうに考へ

てみました。なまじい昔の高僧だとか聖徒だとかの伝を読んだ彼には、動ともすると精神と肉体とを切り離れたがる癖がありました。肉を鞭撻すれば霊の光輝が増すやうに感ずる場合さへあつたのかも知れません。(p. 213)

Kは昔しから精進といふ言葉が好でした。私には其言葉の中に、禁欲といふ意味も籠つてゐるのだらうと解釈してゐました。然し後で實際を聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれてゐるので、私は驚ろきました。道のためには凡てを犠牲にすべきものと云ふのが彼の第一信条なのですから、摂慾や禁慾は勿論、たとひ慾を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。(p p. 258~259)

上記の例文のように彼は精神の優越を挙げ、徹底した禁欲主義でもって自己を世俗の汚濁から分離させることで、当時の国家主義的、あるいは立身出世主義的風潮に一人抗おうとしたのである。その結果、彼は自己の内面に立て籠ることになるのである。言わばKは明治20年代後半以降の青年像の一つといえるが、彼は近代国家の形成によって多様な政治的可能性が段々喪失して行く中で「それぞれ政治的な闘いに敗れ、それに対し、内面あるいは精神の優位をかかげて世俗的なものを拒否することで対抗しようとした」¹¹のである。

このように知識人達は一般民衆とは違って、明治時代が個人を重視する民権論的な近代国家の方よりは国家を重視する国権論的な近代国家の方を目指しているというのを見抜いて、それに対抗するために俗世を離れようとしたのである。言い換えれば、明治国家が日清戦争後、強力な国権論的近代国家へ向かって行くのに対して、Kのような人物はむしろこのような国家を無視し、回避するようになるが、このような態度すなわち俗世を離れること自体が彼等においては最後の手段としての対抗であると言えるであろう。すなわち政治的世界に自ら背を向け、日本社会に対して一種の孤独でありながらも絶望的な対抗をしようとしたのである。このことは、まさに一般化した国権論的近代国家から脱しようとする動きであったといえよう。

しかしこのようなKがある日先生にお嬢さんを愛していると告白するようになる。常にKに憧れ、Kを尊んだ先生は、この言葉に少なからず驚き、嫉妬心さえ抱くようになる。この時先生はKに「道」のためには、欲望から離れた愛といえども許されないと、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」(p. 258)という致命的な言葉を言い返す。この言葉はKがいつも先生に

言った忠告であったが、今は逆に世俗的な愛の前で迷っているKに戻って来たのである。世俗から離れて自分が考えた通りに生きてきたKにこの言い返されて来た言葉はとても衝撃的なことであつた。言い換えれば国権論的近代国家から脱しようと思つて世俗から離れたが、再び愛という世俗的な感情におぼれていく自分が許せないのである。Kは結局精神的闘いに破れ、挫折を味わうようになる。それからKは「覚悟、一覚悟ならない事もない」(p. 261)と言い、死を決心するようになる。

Kは明治時代が個人よりは国家を重視する帝国主義的な近代国家＝国権論的な近代国家に進んでいくのに対抗して、自分が主張する「道」の方、つまり主体性を持つ個人を重視する民権論的な道を追求する非政治的な個人主義であつた。彼は立身出世のためには手段を選ばぬという風潮が蔓延した時代にもかかわらず、誰よりも清廉潔白で禁欲主義的に生きようとした。この生き方を貫徹するために彼は、あらゆる世俗的な欲望を放擲し、抽象的な理想だけを高揚させ追い求めたのである。しかし、このような彼が女性への「愛」というきわめて世俗的な感情におぼれ、その「愛」に支配され身動きできなくなっていく自分に気付くのである。その後Kは自らの「意志薄弱」に絶望して自殺を覚悟する。先生はKの覚悟がただお嬢さんに向かった「愛」の感情を諦める覚悟だと思つて安心するようになり、Kを騙して下宿の奥さんに娘との結婚を承諾してもらう。この事実をKは奥さんを通じて聞くことになり、結局友達に手紙を残して自殺する。

手紙の内容は簡単でした。さうして寧ろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから自殺するといふ丈なのです。(p. 278)

Kの手紙からも分かるように、Kの自殺した理由は失恋とか友達の裏切りというより、自分の弱い意志とか絶望的な未来のためであつたと考えられる。もちろん友達がKを騙したことについて失望感を感じなかったとは言えないが、それが自殺の決定的な理由にはなれないのである。つまりKは下宿のお嬢さんを愛していると友達に打ち明けたが、その友達はかえって自分に衝撃的な言葉で言い返す。その時Kは死を覚悟し、その後友達が自分を裏切つたというのも分かるようになる。すなわち友達が裏切る前に死を覚悟していたと言える。従つてKの死んだ決定的な理由は、自分の精神的挫折を悟つたことによるといえる。

(2) 「先生」の死と民権論的「明治の精神」

この小説の主人公である先生もまた、明治時代の知識人であった。彼は当時の地方における立身出世主義の権化のような叔父によって財産をごまかされ、これによって「人間不信」に陥っていた。

私は財産の事をいふと屹度昂奮するんです。君には何う見えるか知らないが、私は是で大変執念深い男なんだから。＜中略＞私は他に欺むかれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺むかれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日迄背負はされてゐる。恐らく死ぬ迄背負はされ通しでせう。私は死ぬ迄それを忘れる事が出来ないんだから。然し私はまだ復讐をしにゐる。考へると私は個人に対する復讐以上の事を現に遣つてゐるんだ。私は彼等を憎む許ぢゃない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ（p p. 84～85）

そんな鑄型に入れたやうな悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです、少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざといふ間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです（p. 79）

両親が生存していた時、叔父は両親から信頼され、いつも自慢の種にされていた。先生は両親の死後、このような叔父に財産を任せられた。しかし信じていた叔父が財産を横領し、先生を裏切った。その後、先生は財産に関する話が取り上げられると、かならず敏感な反応をし、さらに私には父の死ぬ前に財産をきちんと片付けて置かなければならないと忠告までする。このように先生は叔父の裏切りによって人間を信じられなくなったのである。

あらゆる人間を軽蔑した先生は、最初は下宿の奥さんとお嬢さんも信じていけなかったが、お嬢さんを愛するようになることで少しづつ心を開くようになる。しかし、友人のKが同じ下宿に移って来た後には、先生はお嬢さんをめぐってKと三角関係になる。ある日、Kからお嬢さんに対する愛を打ち明けられた先生は、それまでKを尊敬していたが、彼に激しい嫉妬心を抱くようになる。その嫉妬心ゆえに、先

生はKを彼の思想の自己矛盾に追い込み、結局Kを出し抜いた形でお嬢さんの愛を勝ち取るのだが、思想的に自家撞着をきたしたKは自殺してしまうのである。

叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を悪く取る丈あつて、自分はまだ確な気がしてゐました。世間は何うあらうとも此己は立派な人間だといふ信念が何処かにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。（p p. 288～289）

Kの自殺の原因が自分の裏切りにあると考えた先生は、罪責感に苦しみ、「自己不信」に陥る。なぜなら、明治の知識人である先生自身もまた、「倫理的な人間」としての揺るぎない自負を持っており、叔父にだまされた時も叔父の裏切りに対して軽蔑と憎悪をあらわにしたからである。常に先生は自分をも信じられない不安感に苛まれるようになる。しかし一時先生はその不安感をなくそうとしてお酒とか本とかに夢中になったり、学問を以て社会に認定される人になろうともする。このことはまさにKに対する罪責感を振り落とそうとする身悶えの発散であった。

無理に目的を拵えて、無理に其目的の達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快です。私は何うしても書物のなかに心を埋めてゐられなくなりまして。私は又腕組をして世の中を眺めたのです。（p. 288）

先生は不安感を忘れようとして学問に夢中になって社会に認定されようとするが、それはもう本当の先生自身ではないので、やはり我慢できないのである。結局先生は、Kの死後、社会と遮断された生活を送るようになり、社会に認められようとする努力も放棄するようになるのである。しかし、先生はKの自殺が自分の裏切りによるものではないのではないかと少しづつ考えるようになる。Kの自殺した当時の先生は「愛」という切実な目当てがあつたのでひたすらにKの死が失恋であるとしか考えられなかった。しかし時間が経つにつれてその理由だけではないというのが分かる。この時先生は自分も驚くほどKと同じ道を歩んでいるというのを悟る。

私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくって仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひ出しました。さうして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと、同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横通り始めたからです。

(p. 291)

先生は人間が守るべき倫理を踏みにじつても、国家主義的な方向あるいはそれに根ざした立身出世的な方向にまっしぐらに進んでいる明治国家に、Kは孤独な闘いを挑んでそれに敗れて自殺したのだと思ひ始める。すなわちKは「寂しくて死んだ」のである。さらに、先生自身もKが歩んだ道を知らず知らずのうちにたどっていることに気付く。それは必然的に自殺へと続くのである。

夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでした。何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戯ひました。(p. 297)

「明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つた」という先生の言葉は、明治の精神の終焉を示している。これは多様な政治的可能性を持っていた明治の消滅とともに多様な個人の個性や自由を認定する近代国家の形成の可能性が消滅したのを示している。すなわち明治時代とともに始まった民権論的な近代国家の可能性が明治時代が終わることによってそれと同時に終わるのを意味する。

先生は乃木大将の遺書を見てもっと自殺の決心を固める。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死なう死なうと思つて、つい今日迄生きてゐたといふ意味の句を見た時、私は思はず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらへて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年迄には三十五年の距離があります。乃木さんは此三十五年の間死なう死なう

と思つて、死ぬ機会を待つてゐたらしいのです。私はさういふ人にとつて、生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました。それから二三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。(p. 298)

ここに表れている乃木大将の死は、自分の任務を果たさないまま、今迄生きて来たという罪責感による殉死である。しかし先生はそれを哀悼しようとして乃木大将の死を自分の遺書で述べているわけではない。ただ先生は、乃木大将が死を覚悟しながらも行き続けてきた年月が、自分と同じであると思ひ、言及している。先生はKの死後から今迄の15年間を苦しみ、同様に乃木大将も35年を苦しみながら生きてきたので、先生はその辛さに共感する。それから先生は乃木大将の死ぬ瞬間が生きていた35年より辛くはなかつただろうと思う。それは先生の生きてきた年月がとても辛かつたので分るのである。このように先生は乃木大将の孤独感と辛さは理解しているが、そうだからと言って乃木大将の死と先生の死の意味が同じだとはいえない。これは「乃木さんの死んだ理由が能く解らない」(p. 298)と言う先生の台詞でも分る。これはまさに、先生の死と乃木大将の死が違ふ意味を持っているということを表している。先生はKの死んだ理由を最初は分らなかつたが、後で悟つたように、もし乃木大将の死がKと先生のような理由による死であつたら先生は十分に乃木大将の死も理解できたであらう。しかし先生としては乃木大将の死の意味が理解できなかったわけである。

先生は「もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だ」(p. 297)という。もともと殉死というのは封建時代の武士達の秩序で、君主に対しての絶対原理であつた。前にもすこしふれたように一部の知識人達はこのような殉死(乃木大将のような殉死)を「愚挙」と断じた。従つて『心』での殉死という意味は一般的な殉死として理解してはいけないと思われる。これは「古い不要な言葉に新しい意義を盛り得た」(p. 297)という先生の言葉にも端的に表れている。すなわち『心』での先生は自立した個人(知識人)が主体的に正しいと判断した一つの思想、個人の個性を重視するという「明治の精神」への殉死を意味するのである。

5. 終わりに

以上に、漱石の『心』に表れた三人の死を通して「明治の精神」について考察してみた。

「明治の精神が天皇に始まって天皇に終わった」という先生の言葉は、明治の精神の終焉を示しているが、それに続く「明治の精神に殉死する」というのは当時の日本人の中で二重の意味を内包していたといえよう。まず、私の父に代表されるような一般民衆の側に立って見るなら、「明治の精神」とは、明治天皇を頂点に、富国強兵に基づく国家主義的な近代国家を形成する思想に他ならないのであり、その根源は国権論にある。明治国家を構成した大多数の一般民衆が、「明治の精神に殉死する」という時、それは、まさに国権論的国家の頂点に位置した天皇に殉死することを意味する。しかし、漱石が『心』でいう「明治の精神」とは、当時の良心的、倫理的な知識人のKや先生の思想にも見られるように、個人の個性や主体性を重視するような民権論的な方向にも行きうる健全な思想を意味するのである。従って、先生の「殉死」とは、こうした民権論的思想の可能性の消滅＝思想の健全さの死に殉じて死ぬことであったのである。

〔引用文献〕

<テキスト>

夏目金之助、『心』（漱石全集 第9巻）、岩波書店、1994

<単行本>

松本三之介、『明治思想史』、新曜社、1996

松本三之介、『明治精神の構造』、岩波書店、1993

丸山真男、『戦中と戦後の間』、みすず書房、1997

伊豆利彦、『漱石と天皇制』、有精堂、1989

小森陽一、『夏目漱石をよむ』、岩波書店、1993

柄谷行人、『漱石論集成』、第三文明社、1992

桶谷秀昭(外)、『文芸読本 夏目漱石』、河出書房新社、1975

伊沢元美、『夏目漱石』、有精堂、1970

(注)

¹ 日本における近代化は明治維新とともにその出発が帝国主義的で軍国主義的であったと間違えやすいが、その以前に日本の近代化はどんな方向へも決まっていない、本当に混乱した状態であった。当時、代表的な思想家の竹越与三郎は「戊辰慶応の革命は、親政を理想せる理想的の革命にもあらず、王朝を回復する復古的の革命にもあらず、社会自身土崩瓦解せんとする乱世的革命」（松本三之介、『乱世的の革命』『明治思想史』、新曜社、1996、pp. 19～20からの再引用）であると言った。このように竹越与三郎によれば、明治維新は

新しい政治体制を作るためでもなかったし、天皇を中心とする政治体制を作ろうと意図した動きでもなかった。それはただ混乱した状態、一言で言えば歴史の多様な可能性が含まれている時代であったと言えるであろう。

² 立身出世主義は大学が帝国大学に変わる帝国大学令（1886年）によって成り立った。「帝国大学は国家の須要に応ずる學術技芸を教授し及び其蘊奥を攻究するを以て目的とす」（丸山真男、『明治国家の思想』『戦中と戦後の間』、みすず書房、1997、p. 219からの再引用）という帝国大学令からの一節でも分かるように、大学が真理と理想を追求するばかりではなく、「国家の須要に応ずる」システムに変わってしまったのである。これによって立身出世主義の傾向が澎湃とするようになった。

³ 松本三之介によれば、「自家の精神内に充足を求むる」ことを目指す「精神主義」は、「国家や社会の利益を個人のそれより優先する従来の視点に対して、むしろ自己の内面の世界を重視する個の立場が起点となっていた」（松本三之介、『自我の鼓動』『明治思想史』、上掲書、p. 197）とされているように、明治の国権論に対し、民権論は「精神主義」の傾向を持っていた。

⁴ テキストとしては『心』（漱石全集 第9巻）、岩波書店、1994を使用。以下の引用文の頁番号は本書のものである。

⁵ 松本三之介、「明治の終焉—乃木將軍の殉死」『明治思想史』、上掲書、p. 240

⁶ 伊沢元美、「明治の精神と近代文学—夏目漱石「ころ」をめぐる」『夏目漱石』、有精堂、1970、p. 229からの再引用。

⁷ 松本三之介、「明治の終焉—乃木將軍の殉死」『明治思想史』、上掲書、pp. 240～241

⁸ 「天皇は国民を戦争、狂気と死に駆りたてるためのイデオロギー的、情緒的シンボルであった。」（伊豆利彦、『夏目漱石と天皇制』『漱石と天皇制』、有精堂、1989、p. 72）

「国民は政治に対してますます無関心となり、「無知な」政府、「無知な」官吏、「無知な」警察官、「無知な」裁判官が、「無知な」国民を、天皇の名によって専制的に支配した。これが天皇制の特質である。」（伊豆利彦、『夏目漱石と天皇制』『漱石と天皇制』、上掲書、p. 76）

⁹ 桶谷秀昭、「淋しい「明治の精神」—『ころ』」『文芸読本 夏目漱石』、河出書房新社、1975、p. 80

¹⁰ 洋学中心の教育から一変して、1881年以後は儒教と国学を復活させた。これを実現させたのがまさに1890年に発布した教育勅語である。ここで儒教の重要性が強調された理由は、儒教の根本になる忠孝思想に表れ

た父と息子の関係を以て、まるで天皇（＝父）と臣民（＝息子）という関係を造作するためであった。松本三之介は教育勅語の構造について次のように述べている。「教育勅語は、議会政治の開幕を前にして予想された政治的対立と政府批判の激化に備えて、「民心ヲ結合スル」という政治的意味をその奥に含んだものであった。そして、そうした課題を充たすものとして、まず第一に国家への忠誠・服従・献身（「共同愛國ノ義心」）

を「臣民ノ美德」としてすべての国民に要求し、そのうえで日常的な私的道德（「孝悌忠信ノ徳行」）を説くという構造をなしていた。」（松本三之介、「教育勅語をめぐる思想の相克」『明治思想史』、上掲書、p. 114）

¹¹ 柄谷行人、「漱石の多様性」『漱石論集成』、第三文明社、1992、p. 330

（主任指導教官：水島裕雅）